

といふ親友から推薦せられて、始めて王の知る處となり、其の召しに應じて謁見して、忽ち王の信用を得、茲に始めてケシュ及びその附近の領主に任命せられたのであつた。かく王に親近して居る人に親友を持つて居つたことは、此の際帖木兒の爲には甚だ利益であつたことと思はれるが、此の翌千三百六十二年に、王がその子息のイリアス・クワージャをサマルカンドに残してトランスオキジアナのことを統べしめ、自分は東の本國に歸つた時には、實に帖木兒は王の命によつて、サマルカンド朝廷の民政總理の任に當つたのであつた。僅かに二十八歳ばかりの青年に此の大事が托せられたことから考へて見ても、彼の手腕の早くからぬきんで居たことが解るであらう。

## 五 流離困頓の時代

されど彼の生涯にもしかく得意の時ばかりあつた譯ではない。かくて彼が王子クワージャの下に父王寄命の任務に服して居る間に、一方軍事總管の役目をうけて居つた人は、反つて王に對して叛逆を企てたので、彼は終にあきらめをつけて都サマルカンドを後にして、落人の境涯に入らねばならぬことになつた。但しこのことは彼の没後二十年許りにしてアリといふ人が編纂した『ザファル・ナーマ』即ち『戦勝記』なる書物に據つたのであるが、また他の書物によれば、却つて帖木兒が王の軍を逐ひ返す計畫を立て、それが發覺して殺されやうとしたので逃げ出すことになつたのだとも傳へられて居る。前後の事情を考へ合せると、これの方が正しいかも知れない。此の後暫らくの彼の境涯は實に慘憺たる光景を極めたもので、悲酸の運命を嘗め盡したものとひひ得るであらう。元來回教徒のことだから、その妃は數多かつた中にも、殊に寵幸したのはかのカズガンの娘ツルカン・アガといふのであつ